

(その他)

基礎看護学におけるフィジカルアセスメント教育のあり方に関する一考察 — 臨床の看護師が感じる課題と看護系大学での教育の現状から —

神谷美香¹⁾ 清水八恵子¹⁾ 武藤英理²⁾ 須賀京子¹⁾

I. はじめに

少子高齢化、医療の高度化・複雑化、在宅医療の進展など医療を取り巻く社会情勢が変化し、看護を取り巻く環境も大きく変化している。看護師の活躍する場や人々から期待される役割は多岐にわたり、看護師はより専門性の高い知識と判断力・実践力が求められるようになった。

このような時代とニーズの変化に伴い、看護基礎教育においても大学化が進み、2007年に看護基礎教育の充実に関する検討会（厚生労働省、2007）が行われ、2009年度から新カリキュラムが施行された。その中で、基礎看護学で教授する看護技術は「対象の理解と看護実践の基礎となる技術を習得する内容とする。とくに対象の理解として、コミュニケーション技術、フィジカルアセスメント技術は看護師には欠かせない能力として教育内容に含めた。」と述べられている。さらには、看護師教育の基本的な考え方の留意点にも「コミュニケーション、フィジカルアセスメントを強化する内容とする。」と明記され、看護基礎教育においてコミュニケーション、フィジカルアセスメントは特に重要で強化すべき内容として位置づけられた。

一方、平成24年に中央教育審議会が答申した内容を見ると、大学改革への期待として、「今後の時代の変化に対応するための基礎力と将来に活路を見出す原動力として、有意な人材の育成や学術研究の必要性」が述べられている。加えて、「大学は地域社会や企業と連携することで、活発な社会活動を掘り起こすイノベーションを生むことができる」と述べられている（文部科学省、2012）。つまり大学の使命は、教育、研究に加えて地域貢献が挙げられ、本大学においても、その役割を担っていく必要がある。

本大学看護学科は、周辺地域の看護職不足を解決するため、実習施設や大学近隣の病院などへの就業を念頭に置いて開設された学科である。大学が位置する県の看護職員需給見通しは、全国と同様に職員不足の状況であり（岐阜県、2013）、育成した人材を地域に出すことは大学の地域貢献でもっとも求められる役割である（星、2013）（神谷、2016）。地域に還元されるべき人材はどのような人材でもよいというわけではなく、看護系大学として、現在の看護基礎教育の方針に準じた「看護実践力」を兼ね備え、専門性が高く、臨床で活躍できる看護師の養成を責務とするべきである。そのためには、看護の基盤となる基礎看護学の段階から臨床を視野にいれた教育を構築する必要があると考える。

そこで今回、地域貢献の一つとして、研究者らが調査した臨床の看護師が大学に求めるニーズの中から、臨床の看護師が感じる課題について分析した。その結果、「看護実践力」の強化につながる基礎看護学におけるフィジカルアセスメント教育に関する教授内容を考える機会を得たので報告する。

II. 臨床の看護師が抱える課題 — ニーズ調査の結果から —

平成26～27年にかけて、研究者らはA大学周辺の病院に従事する看護師が大学に求めるニーズを調査した。無記名の自記式質問紙を、調査への同意が得られた8病院に従事する看護職1,470名に配布した。1,216名より回答が得られ、すべての回答を有効回答（回収率・有効回答率82.7%）として分析した（神谷、2016）。そこで「看護師が認識している自分自身の課題」について質問をした結果、「各部署で必要な知識

受付日 2017.10.30 / 受理日 2017.12.4

1) 朝日大学保健医療学部看護学科（基礎看護学）

2) 羽島市民病院

や技術」について、「フィジカルアセスメント」が多く、約4名に1名(1094名の内268名)が課題であると感じていた。調査では更に「フィジカルアセスメント」を課題とする内容について、自由記載として求めたことから、今回、268名から記載が得られた42名の内容を質的に分析した。分析は、自由記載内容の文脈を考慮しながらコード化し、共通点を比較しながらサブカテゴリー・カテゴリー化を行った。データの解釈の確証性を確保するため、質的研究の経験のある数名の研究者らとともに、ディスカッションをしながら行った。

結果を表1に示す。看護師42名の記載内容から47のデータが抽出でき、8のサブカテゴリー、4のカテゴリーに分類できた。4のカテゴリーは、【呼吸器系】、【循環器系】、【アセスメント力・判断力】、【知識・技術不足】であった。

【呼吸器系】では「呼吸」、「呼吸音」、【循環器系】では「循環」、「心音」、【アセスメント力・判断力】では「観察からアセスメントにつなげる力」、「正常・異常の判断」、【知識・技術不足】では「知識不足」と「技術不足」といった、それぞれのカテゴリーに対し2のサブカテゴリーで構成されていた。

表1. 看護師が認識するフィジカルアセスメントの課題内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (記載内容の例示)
呼吸器系	呼吸	<ul style="list-style-type: none"> ・バイタルサイン (呼吸) ・呼吸に関わる技術とアセスメント力 ・呼吸状態の観察 ・呼吸器全般
	呼吸音	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸音 ・肺副雑音
循環器系	循環	<ul style="list-style-type: none"> ・循環に関わる技術とアセスメント力 ・心電図モニター ・循環器系全般
	心音	<ul style="list-style-type: none"> ・心雑音 ・バイタルサイン (心音)
アセスメント力・判断力	観察からアセスメントにつなげる力	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の患者にフィジカル (イグザミネーション) を行って、アセスメントにつなげることが難しい ・観察力を養いたい ・一つの症状から結び付けて全身状態のアセスメントをすることは難しい ・看護展開が十分にできない ・S、O情報しか記録できない
	正常・異常の判断	<ul style="list-style-type: none"> ・患者さんの身体の中で起きている事が、特に訪問などではデータもないため、よく分からない ・急変徴候が判断できない ・バイタル測定ができるが、異常の発見ができない
知識・技術不足	知識不足	<ul style="list-style-type: none"> ・急性期から療養になって患者層がかわって戸惑うことがある ・フィジカルな側面から何が問題で何が必要であるかがわからず、医師からの指示に任せている現状がある ・知識がまだまだない
	技術不足	<ul style="list-style-type: none"> ・打診、聴診が不十分 ・他科など初めての疾患や処置では分からないことが多く戸惑う

この結果から考えられることは、広範な内容に渡るフィジカルアセスメント項目の中でも、看護師はとりわけ呼吸と循環のフィジカルアセスメントを課題と感じていることである。加えて、呼吸と循環は人が生きていくという一つのしるしであり、働く場を問わず、看護師が日常的に対象を観察しアセスメントすることを求められる項目である。実際、臨床看護師が実施する頻度の高い項目として、「バイタルサイン」、「呼吸器系」、「循環器系」が挙げられており(大沢ら, 2012)、看護師は、日々の看護実践で必要であるがゆえに、技能の未熟さを感じる機会が多いと推察される。

また、臨床で求められるアセスメント力・判断力および知識・技術不足については、看護基礎教育で培った知識や技術を基盤にして、所属する科の治療内容や看護方針、対象の特性に応じて判断しながら実施する

応用的なアセスメント能力であると考えられる。そのため、日々変化する対象のニーズに適した看護ケアを科学的に実践するために知識や技術を深め、個々の能力を高める必要性を感じていると考えられる。

しかしながら、記載内容に示されるようなバイタルサイン、心音、呼吸音、打診・聴診などの技術や測定して正常・異常の判断をすることは、基礎看護学で教授される基礎的な能力であり、修得すべき内容でもあるとも言える。また、対象を観察しアセスメントにつなげる力の不足は、対象のフィジカルな側面から専門的に解釈・分析し、根拠に基づいた看護ケアを実施することが困難となり、How to のケアに依存する可能性も否めない。

したがって、今回の結果から導き出される大学でのフィジカルアセスメントの教育は、まず看護師が認識している課題に対する基本的な知識・技術を確実に修得させることである。そして、臨床で求められる頻度の高い内容を重点的に強化するようなプログラムを構成することであると考えられる。

Ⅲ. フィジカルアセスメント教育の現状 — シラバスから —

全国の看護系大学の基礎看護学において、現在のフィジカルアセスメント教育はどのようになされているのか。とりわけ、呼吸、循環に関する内容はどの程度の時間数で教授されているのか。平成 29 年度、全国の看護系大学 255 校のうち、Web 上で公開されている約 100 校のシラバスから、無作為に抽出した 23 件について、フィジカルアセスメントの教育内容の傾向を調査した。調査は、平成 29 年 8 ～ 9 月にかけて行った。

科目名では、「フィジカルアセスメント」が 21 件、「ヘルスアセスメント」が 2 件であった。すべての科目が必須科目となっていた。開講年次および時期は表 2 (a) の通りであった。単位数では、表 2 (b) の通り、最も多いのが 1 単位であり、時間数は 30 時間が多かった。科目の種類について表 3 に示す。呼吸、循環の講義および演習が実施されるコマ数は、各 1 コマ～ 3 コマであった。

表 2. 授業の開講年次・時期・単位数

(a) 開講年次・時期

学年	前期	後期	計
1 年次	1	7	8
2 年次	12	3	15
合計 (件)	13	10	23

(b) 単位数

単位数	時間数	計
1 単位	30 時間	7
2 単位	60 時間	16
合計 (件)		23

表 3. 呼吸・循環の講義・演習の実施頻度

		科目の種類	
		呼吸器系	循環器系
コマ数	1	6	6
	2	9	9
	3	3	3
	不明	5	5
合計 (件)		23	23

この結果から、科目の時間数、開講年次や時期は大学により様々であることが分かる。また科目の種類の中で呼吸器系、循環器系に注目し、それらを教授する時間数についても、少ない大学と多い大学で数時間の違いがあり、限られた時間の中で何に重きを置いて教授するかについては、大学独自の判断に委ねられていることが伺える。

日本におけるフィジカルアセスメント教育は、1990 年頃から重要視されはじめ、1990 年代後半になって急速に看護基礎教育の現場に広がった。1999 年および 2005 年、2012 年に行われた実態調査からみると、時代の経過とともにほとんどの大学が必須科目として取り入れており、看護におけるフィジカルアセスメントの必要性が認識されていると言える (太田ら, 2000) (篠崎ら, 2006) (高橋ら, 2013)。しかしながら、調査当時から科目の時間数、開講時期、教授すべき内容は、大学によりばらつきがみられることは指摘されてきた。今回の結果は、全国の看護系大学のごく一部の結果であるものの、ばらつきがみられる状況は現在でも続いていた。

しかしながらその一方、教授すべき内容についてみると、さまざまな研究がなされつつある。例えば、

服部ら (2003), 尾原ら (2003), 松永ら (2013) は, 看護学生や卒業生を対象に, フィジカルアセスメントの技術習得状況や経験状況を調査し, 教育の効果と課題について評価している. 篠崎ら (2007) は, 全国の看護系大学に対し, 呼吸に関する最小限必要なフィジカルアセスメントの教育内容について調査し, 限られた時間で効果的な教育方法を開発する必要性を述べている. また, 滝島ら (2010) は, 看護学生のフィジカルアセスメント能力がと臨地でのフィジカルアセスメント能力につながると考え, 臨地で容易に実施できるための看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育内容を検討している. 高橋ら (2013) は, 全国の看護系大学を調査し, フィジカルアセスメント科目に必要な不可欠な実技演習項目と習得レベルを明らかにしている. その調査結果を基に, 小坂ら (2014) は所属する大学でフィジカルアセスメントの演習項目を見直し, 教育内容を検討することを実施している.

以上の結果から, 現状として, フィジカルアセスメント教育は大学の独自性が強いものの, 教授する内容については広範囲であることが明らかである. そのため各大学は, 改めて今までの教育内容を振り返り, 限られた時間で何をどこまで教授するかについて検討し, 教育内容を精選していく段階にあると考えることができる. そして, 精選するための方向性としては, 臨地実習や臨床で実施頻度が高く, 活用できる項目を中心に教育内容を改善していくことが求められている状況である.

本大学のフィジカルアセスメント科目は, 2年生の前期, 必須科目, 2単位として開講されている. 呼吸器系・循環器系のフィジカルアセスメントに費やす時間は, 講義と演習を含めて各3コマである. 時間数からみると, 他大学と比べて, 多くの時間を費やしていることが分かった. しかしながら, 学生の学習状況として, 基礎看護学での演習と臨地実習でのアセスメント状況から, 教育すべき内容が十分伝えきれていないと感じることが多々ある. 現状の教育内容に対して, 臨地実習や臨床につながりやすい「看護実践能力」を養うために最小限に必要な内容を精査し, 優先順位を考えながら具体的に検討していく必要がある.

IV. おわりに

「臨床の看護師が感じる課題」「フィジカルアセスメント教育の現状」から, 本学における今後の基礎看護学におけるフィジカルアセスメントの授業のあり方を検討した.

1. 授業の中で教授しなければならない内容は多岐にわたる. そのために最小限必要な内容を精選しながら, 授業を構築していく必要がある. そのための視点として, 実習につながり臨床で活躍できる「看護実践力」が強化できる内容を軸に考える必要がある. 具体的には, 呼吸器系・循環器系のフィジカルアセスメント能力や, アセスメント力, 打診や聴診などの基礎的な技術力を高めることを重要視しながら授業構成を考える必要がある.
2. バイタルサインの技術や対象を観察しアセスメントにつなげる力は, 基礎看護学分野において, 看護技術や看護過程でも学習する内容である. 限られた授業時間でフィジカルアセスメントを効果的に教授するために, 他科目の学習内容を1単元ごとに区切ってしまうのではなく, 有機的につなげていくようにすることも必要である.
3. 本大学では, フィジカルアセスメントは基礎看護学に位置づけられて開講している. しかしながら, フィジカルアセスメント技術を活用し看護実践力を強化するには, 4年間の看護基礎教育を通して継続して教育される必要がある. そのため, 基礎看護学で学修したことを土台とし, 各論で発展させ, 臨床にも有機的につなげていくことができるような体制が必要であり, 基礎看護学以外の分野からの情報・意見交換ができるように働きかけながら, 授業を構築していくことに取り組みたい.

現在の日本におけるフィジカルアセスメント教育内容は模索状態にある. しかし時代とともに, 社会が求める看護の専門性, 大学の使命, そして看護基礎教育を十分に反映させたフィジカルアセスメントの教授内容を構築していく段階に入っている. そのために本大学でも, 次年度の開講に向けて, どのような授業内容と構成にするか, さらなる検討を重ね具体化していきたい.

文 献

第6期岐阜県保健医療計画（2016-10-12）

<http://www.pref.gifu.lg.jp/kodomo/iryo/horei/11221/med6.data/honpen-med6.pdf>

服部容子, 吾妻知美, 小島悦子 (2003). 授業「フィジカルアセスメント」の評価 —学生の技術習得状況に焦点をあてて—. 天使大学紀要, (3), 25-36.

星北斗 (2013). 近未来の看護と病院・学校の役割, 病院, 72 (5), 371-375.

神谷美香, 武藤英理, 清水八恵子, 清水美恵, 伊藤恒子, 栗田孝子, 須賀京子 (2016). 看護系大学における地域貢献に関する研究 —A 大学周辺地域の看護職のニーズ調査による検討—. 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, (3), 1-10.

小坂信子 (2014). 看護基礎教育における「フィジカルアセスメント」教育内容の検討 —文献と主要テキストから—. 日本赤十字秋田看護大学紀要, (19), 55-62.

厚生労働省 (2016-10-10). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>

松永早苗, 今井恵, 千田美紀子, 井上美代江, 辻俊子, 上野範子, 森下妙子 (2013). 看護大学1年次における「フィジカルアセスメント」の授業評価と課題. 聖泉看護学研究, (2), 97-102.

文部科学省 (2012-8-28). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf

尾原喜美子, 橋本和子, 高谷嘉枝, 早川由佳子 (2003). フィジカルアセスメント教育の取り組み (その1) —学生のアセスメント技術の経験状況と自己評価—. 高知医科大学紀要, (19), 71-83.

大沢たか子, 三浦かず子, 谷愛, 中平紗貴子 (2012). A 県内の臨床看護師のフィジカルアセスメント技術に関する現状調査. 高知学園短期大学紀要, (42), 99 - 112.

太田勝正, 加藤あさか, 八尋道子, 真弓尚也 (2000). わが国のフィジカルアセスメント教育の実態 —平成11年度全国調査の結果より—. 看護教育, 41 (12), 1060-1065.

篠崎恵美子, 山内豊明 (2006). 看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育の現状 —2005年度看護・看護系大学の全国調査より—. 看護教育, 47 (9), 810-813.

篠崎恵美子, 山内豊明 (2007). 看護基礎教育における呼吸に関するフィジカルアセスメント教育のミニマム・エッセンシャルズ. 日本看護科学会誌, 27 (3), 21-29.

高橋正子, 白井美帆子, 北島泰子, 中村光浩 (2013). 看護系大学におけるフィジカルアセスメント教育に関する実態調査 —教育の現状と必要不可欠な実技演習項目. 習得レベルについて—. 東京有明医療大学雑誌, (5), 17-26.

滝島紀子, 飯島伸子 (2010). 看護基礎教育における「フィジカルアセスメント」の教授内容に関する一考察. 川崎市立看護短期大学紀要, 15 (1), 19-27.